

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370240

研究課題名(和文) 朝鮮詠の領分 朝鮮俳句とその俳人脈をめぐる総合的研究

研究課題名(英文) Study of Chosen Haiku: Development of Chosen Haiku and literary community formation

研究代表者

中根 隆行 (Nakane, Takayuki)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：80403799

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本による植民地統治期の朝鮮半島では、主に朝鮮に移り住んだ日本人によって俳句の作句活動が盛んであった。当時、在朝鮮日本人によって俳句は朝鮮俳句と呼ばれた。本研究は、朝鮮俳句の俳壇形成を分析し、朝鮮俳句の展開を実証的に位置づけることを目的としている。朝鮮俳句は1910年代に本格的な俳壇形成が始まる。そして、1920年代から1930年代にかけて、朝鮮俳壇では朝鮮俳句とは何かをめぐる議論が巻き起こっている。そのなかで、日本語で俳句を作る朝鮮俳人も登場している。本研究では、このような朝鮮俳句の展開を第二次世界大戦後も含めて明らかにしている。

研究成果の概要(英文)：In Korea, during the Japanese colonial period, mainly Japanese people living in Korea enjoyed making Haiku. At that time, Haiku made by those Japanese residents in Korea were called 'Chosen Haiku'. The purpose of this research was to analyze the formation of the literary world of Chosen Haiku, and empirically locate the development of Chosen Haiku. The formation of the literary world of Chosen Haiku began in earnest in the 1910s, from 1920s to 1930s, the literary world of Chosen Haiku started to question what Chosen Haiku is. Among them, Korean haiku poets that make haiku in Japanese, with No-Sik Park focusing on them, have also appeared. This research examines the development of such Chosen haiku, including after World War II.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：朝鮮俳句 朝鮮俳壇 朝鮮表象 朝鮮(韓国)俳人

1. 研究開始当初の背景

1910年から1945年にかけての日本による植民地統治期、在朝鮮日本人に最も親しまれた創作文芸は俳句であった。俳句は、小説や近代詩よりも身近な創作文芸であり、短歌よりも手軽に作ることができる。朝鮮では、内地とはやや趣を異にするが、1920年頃から俳句の大衆化も唱えられてもいる。また俳句は、西欧伝来の輸入文芸ではなく、それぞれ純国産の伝統的な文芸であり、いわば宗主国文芸の最たるものであった。それゆえに、俳句を詠むということは、外地・海外に暮らす日本人にとってその都度日本人であるというナショナル・アイデンティティを確認する契機となる。ところがその一方で、俳句は次第にその地の地域性に根ざした議論も招きよせることになる。こうした外地・海外といった日本人移住者のコミュニティのなかで、在朝鮮日本人を主とした朝鮮俳句のありようを検証し、位置づけることが本研究の目的である。

朝鮮における俳壇形成は、「京城日報」紙上に「京日俳句」欄が開設された1910年から本格化するといつてよい。京城日报社の初代社長はホトトギス系の重鎮吉野左衛門であり、これ以降、朝鮮俳句はホトトギス系俳句を中心に展開してゆく。1920年には京城で楠目橙黄子らが俳誌「松の実」を創刊、1920年代半ばから平壤、元山、大田、木浦、光州、釜山といった朝鮮各道の主要都市でも俳誌が続々と発刊されている。1920年代前半の時点では、まだ朝鮮半島と旧満州地域との境界も未分化であり、朝鮮の俳誌に在満俳人が投句するという状況であったが、1930年前後には朝鮮の地域的特徴を探求する議論も登場し、朴魯植を筆頭とする朝鮮俳人の台頭が目立つ時代になる。朝鮮半島は、台湾や旧満洲よりも俳句活動が活発であり、長らく「朝鮮俳壇」と称されたほどに、日本俳人や朝鮮俳人によって俳壇形成が進んだ地域であった。

だが、こうした朝鮮俳壇の全容を把握することは、資料散逸等の問題があり大変難しい。けれども、朝鮮俳句の研究は、従来の小説・近代詩・評論を中心とする植民地文学研究とは異なる成果が期待できる稀有な領域である。朝鮮俳句は、その異郷の季を詠む個々の実践とともに、やがて朝鮮の風物を新たな季題として織り込む歳時記的な営みや内地俳壇への対抗、朝鮮郷土色論等の提唱へと向かう。もとより、それはオリエンタリズム的な知の蒐集にほかならない。しかし、その俳人脈は、朝鮮↔内地、朝鮮↔満洲といった地域横断型の展開をみせてもいる。個々人というよりも、こうした集団性を伴った動向は、他の文芸にはみられない、俳句という創作文芸がもつ独特な動きであり、朝鮮という異郷にあって変成されたその地域主義的な傾向性

は、宗主国文芸という観点では異彩を放っている。本研究では、朝鮮詠における創作的実践、その地域横断的な俳人脈の形成、そして帝国日本と在朝鮮の間に揺れる朝鮮俳句の地域的アイデンティティの形成・変転の経緯を「朝鮮詠の領分」としてとらえ、できる限り解明することをめざしている。

本研究に関連する先行研究で最も注目できるのは、阿部誠文『朝鮮俳壇 人と作品』（上下巻、花書院、2002年）である。在朝鮮日本俳人を中心に人名別にその人物像や朝鮮詠の特徴が詳細に論じられており、資料的にも大変貴重な成果となっている。だが、これに比肩する研究はまだないというのが現状である。韓国の俳句研究は近世中心であり、本研究の関連研究としては日本語訳もなされた許敬震「日本植民地時代における韓国人の俳句創作」(『環』vol.40、藤原書店、2010年1月)があるものの、根拠資料に問題があったり資料的な誤謬も多い。また日本では、楠井清文「植民地期朝鮮における日本人移住者の文学 文学コミュニティの形成と「朝鮮色」「地方色」」(『アート・リサーチ』第10号、立命館大学アートリサーチセンター、2010年3月)が在朝鮮日本人の詩歌を中心に「朝鮮色」「地方色」を論じているが、資料紹介と指摘にとどまっている。そのなかで2013年には高麗大学日本研究センター編『韓半島刊行日本伝統詩歌集』全45巻が刊行された。俳誌は2誌のみの載録だが、こうした俳誌復刻についても注目したい。

2. 研究の目的

本研究は、植民地期における朝鮮俳句の拡がりや、結社・俳誌の動向と俳壇構成、俳人間のネットワーク 俳人脈 とその横断性、内地/外地俳壇との交渉といった観点から検証し、朝鮮詠という創作的実践とその地域的文脈を明らかにする。在朝鮮日本人らの朝鮮詠は、新季題や朝鮮郷土色の提唱といった独自性を有するとともに、朝鮮俳人も含めた内地/外地を繋ぐ人的交流といった社会性を基盤に存立している。また、その俳人脈は1945年の敗戦/解放を経ても途絶えることなく、戦後の韓国俳人との交流にも繋がる。本研究では、この経緯を実証的かつ理論的に分析することで、支配/被支配の力学にこだわらない、朝鮮詠の領分を歴史的に位置づけることが目的である。

3. 研究の方法

本研究では、網羅的な資料調査・収集による実証的作業を旨としている。また朝鮮や外地の俳誌の歴史的な位置づけにかんしては、文学研究・俳句研究の方法論とともに、歴史学や社会学等の方法論も適宜部分的に援用するものとする。本研究は、次の3つの領域

から構成されている。(1)朝鮮詠の創作的実践の分析と朝鮮／内地各俳誌の動向の検証。(2)朝鮮俳壇の俳人脈と内地／外地俳壇との交渉にかんする検証。(3)朝鮮俳句の地域主義的アイデンティティの推移についての検証。本研究では朝鮮刊行の俳誌や句集を中心に資料調査・収集・分析を継続して実施し、収集資料の整理・書誌作成を実施した。また、国内での資料調査では「ホトトギス」等主要俳誌の動向とともに朝鮮俳句・俳壇関連資料の調査・分析にあてた。外国での資料調査は、韓国を中心に各年度1～2回実施するものとした。

4. 研究成果

本研究では、植民地期の日本語俳句に関する先行研究等の調査・収集、俳誌における外地詠の統計調査を中心に取り組み、朝鮮詠の創作的実践の分析を進めた。また、外地／内地俳誌の動向をとらえるために、朝鮮刊行の俳誌・句集の資料的発掘に力を注いだ。ただし、日本・韓国双方で資料散逸が続いており、特に朝鮮刊行の俳誌の発掘は今後の研究の進展を考える上でも課題となる。

本研究では、朝鮮詠の傾向性を調査するために「ホトトギス」雑詠選の統計分析を実施し、主に1910年代後半から在朝鮮俳人たちの朝鮮詠が徐々に増加し、1920年代半ば以降には、他の外地・海外の載録句に比して、朝鮮からの載録句が多くなる傾向を確認している。こうした「ホトトギス」雑詠選における朝鮮投句者は、草創期の朝鮮俳壇で知られた著名俳人が圧倒的に多いものの、なかには朝鮮で俳句を始めた俳人たちも存在することは注目してよいと思われる。

1930年代後半から1940年代にかけてのホトトギス系俳句の動向は、「ホトトギス」雑詠選における朝鮮からの載録句がほぼ他の外地・海外と比較すると圧倒的に多くなる。ただし、戦時下にいたっては従軍した兵士や軍属たちの載録がより目立っている。

朝鮮俳句は、1930年代前半には朝鮮各道における主要俳誌に限っても十数誌に増加し、朴魯植を筆頭として朝鮮俳人の活躍が目立っている。この傾向は1937年の日中戦争勃発の時期まで続くものの、それ以降、時局の影響からか、朝鮮俳人の活躍が大幅に減少する。ただし、この時期に俳句創作を始めた李桃丘子の例もあり、「水砧」や「京城日報」、「ホトトギス」などをともに数名の朝鮮俳人が戦時下においても活動していたことを把握することができた。

また、研究期間を延長した平成29年度には、朝鮮半島で刊行された俳誌の国内所蔵調査に力点を置き、朝鮮俳句の傾向分析を補完した。朝鮮俳人の育成指導することに定評があったとされる木浦の俳誌「かりたご」など数誌の資料調査と検証を通じて、1935年前後から朝鮮俳壇にも時局に準じた翳りがみ

えることを確認した。

それとともに、旧在朝鮮日本人の敗戦後の俳人脈の展開や、敗戦／解放後の韓国俳人との交流、および日韓の伝統詩歌の比較などにかんする分析を実施して、朝鮮俳句の1945年以降の展開を検証した。すでに公表した研究成果の内容としては、次のとおりである。

朝鮮俳句の草創期となる1910年代の在朝鮮日本人の俳句活動は、いまだに不明な点が多いものの、石島雉子郎や楠目橙黄子らがその中心的役割を担っていたことは間違い無い。

京城在住の俳人らによつてのちに創刊された松の実吟社「松の実」に載録された資料には、遡及的に草創期の朝鮮俳壇を概観する俳論・エッセイがある。この「松の実」は、1920年に京城で創刊された在朝日本人による日本語雑誌で、後年、朝鮮俳句の礎を築いた俳句雑誌と評されている。

たとえば、「松の実」第5号(1921年2月)掲載の蝸牛洞「雉子郎氏と朝鮮」には、この年に朝鮮を去ることになる石島雉子郎についてのエッセイであるが、そのなかには朝鮮の俳句界が三つの隆盛期に分けて略述されている。第一期は、吉野左衛門が「京城日報」紙上に「京日俳壇」を新設し、石島雉子郎に選者を委ねてから、『京日俳句鈔』『続京日俳句鈔』が刊行された時期である。第二期は仁川で発行されていた「朝鮮新聞」紙上に「朝鮮俳壇」欄が開設された頃である。そして、「松の実」が創刊されて以降の時期が第三期と位置づけられている。草創期の朝鮮俳壇は、すでに1910年代から著名な俳人として知られた指導者たち、彼らを支える在朝鮮の俳人たち、そして俳句を投稿する各地の俳人・俳句愛好者たちの三層から徐々に形成されたことがわかる。

1920年の「松の実」創刊時について蝸牛洞は「第一期、第二期時代に保育せられた俳句界は各所に句会を起し時に五句集会となり、時に謄写刷りの会報を発行し、ホトトギス(ママ)の地方俳句に猛然たる勢を示し雑詠などにも相当顔振れが殖たものだ。今度松の実が発行せられて俄に四百名の社員を得た事は決して偶然ではない」と述べている。「松の実」創刊まで指導的な俳句雑誌がなかったという点から推察すれば、この時代に俳句が隆盛した理由は、いうまでもなく新聞雑誌というメディアの存在に求められる。

とりわけ1920年前後になると、「京城日報」の「京日俳壇」欄や「朝鮮新聞」の「朝鮮俳壇」欄のほかにも、複数の日本語新聞や雑誌に俳句欄が登場している。雑誌でいえば、「朝鮮及満洲」や「鉄道青年」などにも俳句欄が確認できる。こうした日本語新聞や雑誌に俳句欄ができるということは、編集者や読者に俳句への関心があったということが確認できるのだが、同時に、新聞雑誌に俳句が掲載されることによって、新たに在朝日本人の俳

句にかんするイメージも高められ、刷新されていったと推察できる。

草創期の朝鮮俳壇において日本語新聞や雑誌の俳句欄が整備されたことを承け、1920年代になると、「松の実」に代表されるような俳誌が徐々に朝鮮各道に登場し、地域俳壇の拠点となる移行期にあたる。この時期以降の朝鮮俳壇では、「朝鮮郷土色」や「朝鮮郷土俳句」といった語で提起される、朝鮮俳句の独自性・地域性の議論が登場している。この朝鮮郷土色の定義は、郷土なる字句が加えられている以上、朝鮮居住の俳人による俳句というにとどまらず、言外の意を汲みとるよう示唆されているといつてよい。朝鮮俳句の独自性・地域性の議論の震源となったのは「松の実」と考えられるが、1920年代末から1930年代にかけての時期に、この朝鮮郷土色論 地方色、固有色 は大きな話題となって拡大されている。

朝鮮郷土色にかんする議論は、朝鮮俳壇独自の議論ではなく、在朝鮮日本人を中心に短歌や川柳などの伝統詩歌の領域でも繰り広げられており、文芸領域のみならず、美術領域では特に喧伝されていたからである。いわば同時代の在朝鮮日本人を主とする朝鮮半島の文芸・芸術界を読み解く鍵語である。この点、朝鮮俳句にかんする朝鮮郷土色の展開については、1920年代のホトトギス系俳句で注目され、朝鮮詠の名手と謳われた安達緑童の俳句に焦点をあてて検証している。

1930年前後から断続的に増加する朝鮮郷土色の議論は、曲がりなりにも朝鮮俳壇が確立期に達していたことを物語っている。朝鮮各地の俳句結社が機関誌をもち、それぞれ俳句雑誌を主宰していた戸田雨瓢や北川左人の一連の業績が登場すること、その活況のなかで改めて朝鮮俳句とは何かという問いかけが朝鮮郷土色の議論へと結実したのである。1930年代は、各地の俳句雑誌が朝鮮俳壇を支える時期となる。

1930年代における朝鮮俳壇の代表的な俳誌といえば、草の実吟社(京城)の「草の実」である。もとより、ほかにも清原柁童を選者に仰ぎ朴魯植や村上杏史が支えた木浦の「かりたご」や、江口帆影郎主幹の元山の「山葡萄」など、各地の地域性を活かして独自に活動した俳句雑誌はあるのだが、朝鮮俳壇の正統性という点からすれば「草の実」がその筆頭に挙げられる。

俳誌「草の実」は、楠目橙黄子を中心に運営された「松の実」の後継誌に位置づけられる俳句雑誌である。「草の実」は、横井迦南と楠俚人が編集を始めとする主幹的な役割を担って、内地在住の楠目橙黄子が選者を務めた俳句雑誌である。創刊は1925年であり1940年まで続いた、朝鮮では最も長寿の俳句雑誌であった。迦南と俚人は、ともに石島雉子郎が主宰した句会である浮城会時代から

橙黄子とともに参加している。句会としての浮城会から松の実吟社「松の実」を経て「草の実」へという道筋を踏まえて考えれば、「草の実」は、京城というよりも朝鮮俳壇の正統的な俳句雑誌と位置づけたほうがよい。

朝鮮俳壇を世代的にとらえたとすれば、石島雉子郎から楠目橙黄子へと引き継がれたホトトギス系俳句の潮流は、彼らが浮城会や「松の実」で指導した横井迦南や楠俚人らが第一世代、そののち高商時代に頭角を現した土山紫牛や大塚楠畝らが第二世代ということになるだろうか。朝鮮俳壇の1930年代は、彼ら第二世代が中堅俳人として地歩を固める時期に相当する。この点、1933年に夭折する朝鮮俳人朴魯植も、1920年代に「松の実」の橙黄子選雑詠欄を経て「ホトトギス」の虚子選雑詠の常連となり、やがて木浦の「かりたご」の中心的な俳人となった第二世代に属し、1930年前後の朝鮮俳壇を支えた人物のひとつである。

1910年代の朝鮮俳壇は、「京城日報」や「朝鮮新聞」の俳句欄といったメディアに依存していた。1920年代になると「松の実」という本格的な俳句雑誌が京城に登場するものの、三年で廃刊となっている。その後継誌と位置づけられる草の実吟社「草の実」は、1933年10月の時点で創刊以来100余号を数えている。同じ時期に創刊された木浦の「かりたご」など各地の俳句雑誌も、継続して刊行されていることを踏まえると、1930年代の朝鮮俳壇は、朝鮮各地の代表的な俳句結社がそれぞれの俳句雑誌をもって自律的に活動できる段階へと歩を進めていたことがわかる。

こののち、日中戦争以降、1941年7月には、朝鮮俳句作家協会の機関誌「水砧」が創刊されている。「水砧」は、「山葡萄」(元山)、「草の実」(冠)(以上、京城)、「かりたご」(木浦)、「いちご」(光州)、「かささぎ」(釜山)といった朝鮮各地の俳誌を統合するかたちで発刊されている。朝鮮俳句作家協会の結成は前月の6月12日のことである。このあと1943年には、朝鮮俳句作家協会は朝鮮文人報国会に吸収合併される。

さて、この時点での俳句愛好家や創作者の多くは在朝鮮日本人であったが、そのときどきの朝鮮俳句の現状を語る際に刮目されたのは朝鮮俳人であった。朝鮮俳壇は、内地の俳句と遜色ないその正統性の承認を内地俳壇に求めた。しかし同時に、内地とは異なる朝鮮俳句の独自性を朝鮮俳人の存在をもって証明しようとしたのである。そのひとつの事例として、「水砧」には、1942年9月号に土山紫牛「半島青年層と俳句」という評論が掲載されている。そこでは、「花鳥諷詠詩の黄金時代とも云ふべき盛観」と喧伝される「半島俳壇」において「半島青年作家の輩出」が特筆されて位置づけられている。

この評論では、朝鮮俳人というか朝鮮俳壇を代表する人物として1933年に逝去した朴

魯植を挙げてその功労を称え、次のように述べられている。「さて朴魯植氏没後の朝鮮俳壇に於ける半島人作家の顔ぶれはどうであつたか それはあたかも朴氏のかの輝かしい遺業を顕彰し、併せてその大いなる遺志を継承するかのごとく、殆ど全鮮各地に亘つて、有力なる青年作家が陸續として台頭し、互に相競つてその多くのすぐれたる作品を世に問ふといふ、半島俳壇未曾有の壮観を呈したのであつた。」

確かに紫牛が記しているとおり、朴魯植の死後、特に彼の影響を受けた李淳哲、李永鶴、張鳳煥ら朝鮮俳人の活躍が「ホトトギス」では目立っている。また、京城の「草の実」には幾人かの朝鮮俳人の名もみられ、紫牛が記す朝鮮俳人も合計で20名弱に及んでおり、1930年代は朝鮮俳人が数多く台頭した時期であることに間違いはない。けれども、紫牛は日中戦争以降、朝鮮俳人の投句が激減したことも指摘している。1939年は朝鮮総督府により創氏改名が始まる年でもあり、各地の俳誌も統廃合を迫られ、「時局の緊迫」が現実のものとなっていたからである。

ところが、紫牛は記してはいないが、この時期から俳句を詠み始めた朝鮮俳人もいる。李桃丘子である。李桃丘子が俳句に惹かれ作句を始めたのは、おそらく1940年秋である。当初は二三の仲間とともに俳句を作っていたそうであるが、その後、作句の機会を得るために、翌年頃から「水砧」関連の句会にも参加するようになる。李桃丘子による「水砧」載録の俳句は、1943年9月の富安風生選雑詠欄の「小さき町昔ながらに青嵐（京城 菊原桃丘子）」が最初である。の以下の三句を確認している。「水砧」は1944年に廃刊するものの、当時、李桃丘子は「ホトトギス」へも投句を始めており、1943年9月には虚子選雑詠に「裏戸より訪ひ訪はるゝも麥の秋（京城桃丘子）」が入選している。

この李桃丘子は、現代韓国を代表する韓国俳人である。敗戦／解放後は、1954年の「ホトトギス」虚子選雑詠再入選、村上杏史との往復書簡を経て、のちに村上杏史が主宰する愛媛の俳誌「柿」への投句と同人推薦、『句集 韓国』の上梓。かつての「ホトトギス」誌上で知る李永鶴、張鳳煥ら韓国俳人との出会いと交流、こうした日韓を跨ぐ俳句を通じたさまざまな文化交流を経て、1990年代にはソウル俳句会に参加する。1994年には、ホトトギス主宰の稲畑汀子から李永鶴ともどもホトトギス同人に推薦されている。海外の同人はこの二人だけであった。それ以降も作句と投句は続けられており、2006年4月には、巻頭とはいかなかったものの、「ホトトギス」の稲畑廣太郎選の雑詠に三句入選を果たしている。

朝鮮俳句の道程を考えると、李桃丘子ら韓国俳人たちは、なぜ解放後も日本語で俳句を詠み続けたのかという疑問が残る。李桃丘

子の父は1943年に西大門刑務所に収監されていることを踏まえると、親日家であったとは判断できない。数少ない資料から推測すると、李桃丘子は、季節の景物をとりあげ言葉に綴る俳句という文芸性に惹かれたのではないかと推測できる。この李桃丘子や李永鶴、崔炳璉らの活動が、現在の韓国における韓国語俳句を含めた俳句活動の源流である。

朝鮮俳句は、確かに日本による朝鮮半島の植民地統治のなかで展開された。それは宗主国の伝統詩歌が支配／被支配の力学のなかで紡がれていったことの証左である。しかし、朝鮮半島でなされた朝鮮俳句の営為は、そのみに収まるわけではない。敗戦／解放後の道程にも目を配れば、朝鮮俳句は、村上杏史と李桃丘子に象徴されるような日韓文化交流史へと繋がっていく。こうした朝鮮俳句をめぐるさまざまな軌跡をより詳細に追うことが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 中根隆行「異郷への仮託 朝鮮俳句と郷土色の力学」『跨境 日本語文学研究』創刊号、笠間書院、東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校日本研究センター、2014年6月、pp.23-33

(2) 中根隆行「李桃丘子と俳句 朝鮮俳句の解放／敗戦前後から現在へ」『跨境 / 日本語文学研究』第3号、東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校 GLOBAL 日本研究院、2016年6月、pp.51-62

〔学会発表〕(計1件)

(1) 中根隆行「朝鮮俳句の戦前戦後 俳句の文芸性と文化翻訳」輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム×東アジアと同時代日本語文学フォーラム台湾大会「文化翻訳／翻訳文化」、2015年11月14日（於台湾台北、輔仁大学）

〔図書〕(計2件)

(1) 中根隆行「在朝日本人と朝鮮俳句 石島雉子郎と楠目橙黄子を中心に」『在朝日本人の日本語文学史序説』韓国ソウル：図書出版ヨンラク、2017年6月、pp.95-103

(2) 中根隆行「1930年代の朝鮮俳壇 朝鮮郷土色の議論と俳句雑誌『草の実』を中心に」『在朝日本人の日本語文学史序説』韓国ソウル：図書出版ヨンラク、2017年6月、pp.310-318

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中根 隆行 (Nakane, Takayuki)
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：80403799

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()